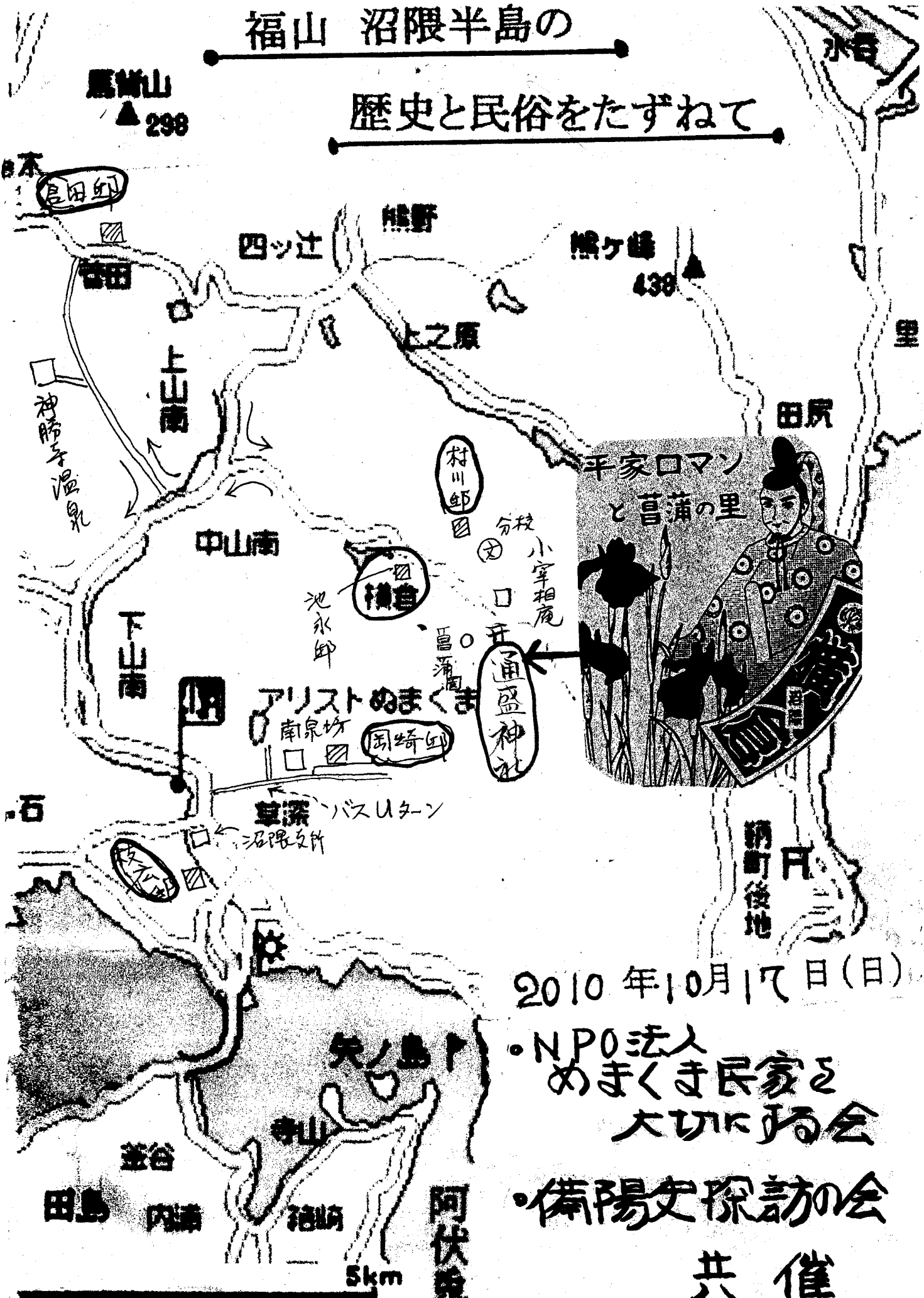


福山 沼隈半島の

歴史と民俗をたずねて



2010年10月17日(日)

- NPO法人めまぐま民家と大切な協会
 - 備陽史探訪の会
- 共催

スケジュール

福山発 8.40 バス → 横倉着 9.20 バス → 池永亦夫邸 14.00 バス → 遙盛神社

徒歩 → 村川邸 (昼食、ぬまき民家など大切なお話と交流) 14.00
11.30

バス → A、B班に分れる (A班) 倉本邸 14.20 バス → (B班) 忍山崎邸 15.00
15.10 (バスの30分待機)

(B班) 倉本邸 15.10 → 枝廣邸 15.55
16.30

→ 福山着 17.00

福山市ぬまくま文化館(枝広邸)周辺のご案内

すぐ近くに

● めまくま文化館 徒歩0分

当地で3代にわたる町医者枝広家の旧邸を譲り受け園池、茶亭（清泉堂）築地塀など往時の面影を残し、新たに表門家と数奇屋造りの主屋、茶室と日本庭園を造営、くつろぎとゆとりの空間をつくり出している。

また、前を流れる山南川の堤防の常夜燈や地神さん、松並木など文化館をとりまく環境が落ち着きを醸し出している。

● 鶴ヶ橋 徒歩10秒

江戸時代初期に干拓された磯新涯（草深新涯）には、かつて、鶴が飛来していた。橋の名前はこれにちなんで付けられた。

● からひもん 唐樋門 車で6分 徒歩30分

寛文年間（1661～1672）に竣工した約50haの磯新涯に造られた樋門。堅い地盤の上に築かれ潮の流入を止め、雨水などの排水を行う施設として新涯を守ってきた。かつては、樋守を常駐させていたが昭和32年（1957）沖に田中新田が完成、その大役を終えた。以降大切に保存され、現在では、広島県の史跡の指定を受けている。



● 亀山八幡神社（奇の宮） 車で3分 徒歩15分

草深地域の八幡さん。現在丘陵となっているが、かつては深い入り江に浮かぶ島であった。神功皇后の船が南からの風に流され、この島に着かれこの神社に立ち寄られた事から「奇の宮」と呼ぶようになった。境内には本殿、拝殿、馬場、鳥ぶすま付きの石鳥居などと共に、めずらしい豊表神社が祀られている。



● 千年藤 車で6分 徒歩30分

千年藤は内海大橋の下、厳島神社参道に生えている。また、千年藤の歌碑（岡田研山書）は内海大橋北詰駐車場内に、菅茶山の漢詩碑（茶山筆）は内海大橋の下に設置されている。

千年藤は『平家物語』巻第四に登場する故事である。平安時代の終わり治承4年（1180）高倉上皇の一行が船で厳島参詣の帰路、沼隈の敷名の沖にさしかかり岸の松に蔓をからませ色濃く咲いた藤を見つけられ、枝を持ち帰るようおおせられた。大納言隆季がこの藤にちなんで「千とせへん、君がよはいに藤なみの松の枝にもかかりぬかな」と詠んだ。沼隈の沿岸は古くから交通要衝地であったことがうかがえる。



大納言隆季が藤の花を差し出し歌を詠む場面【平家物語巻四】



菅茶山梶子湯の碑

● ひかつぶおもて 中継表考案者の長谷川新右衛門 車で6分 徒歩30分



沼隈をふくむ沼隈半島一帯は、名産「備後表」の産地として全国に知られた地域である。高級品「備後表」は、織田信長の安土城や京都の本願寺、江戸幕府の重臣屋敷などに敷かれ名声を博した。原料となる藺草の栽培は、冬の寒い中での植付け、夏の暑い中での刈り取りと苦勞の多い作業が続く。せつかく作った藺草も短いものは捨てられていたのを目にした長谷川新右衛門は、弘治年間（1555～1558）畳表の中央で交差さす「中継表」を考案しその生産を行った。これによって、生産量は飛躍的に増加した。

南泉坊境内の「長谷川新右衛門の墓」には、三面にわたり彼の業績が刻まれている。「墓」と刻んであるが実は文化7年（1810）に建てられた顕彰碑である。

● 山本龍之助記念室 車で2分 徒歩10分

ぬまくま交流館（沼隈図書館）の一室にある。青年団の重要性を全国に呼びかけ、実践した人。『田舎青年』など多くの著書と資料を展示。

◎ 阿伏兎観音

沼隈町能登原阿伏兎岬

県道47号線より市道に入る 車で20分

通称阿伏兎観音さんは正式には 磐台寺観音堂という。この観音堂は元龜年中（1570～73）毛利輝元によって建立され、その後、福山藩主水野氏の庇護を受けた。特に4代水野勝種は寛文7年（1667）堂を改修し石垣を築き、磴道を設けるなど大がかりな整備を行った。

岬崖上に建つ観音堂は海上安全の守護として信仰を集め、九州の諸大名も祈とうを受けるため立ち寄り、海峡を往き来する船は海上より賽銭を奉じ、航海の安全を祈った。また自然と人工の美のかもしれない風景は、多くの文人・墨客の目にとまり、絵画や紀行文として残されている。

- ・崖上に石垣を築いて建つ観音堂（国重文）
- ・観音堂内の藤井松林の天井画
- ・磐台寺本堂（県重文）
- ・観音堂下の海食洞萬籟窟と東に連なる断崖絶壁
- ・観音堂から見える備後灘、田島、口無の海
- ・※観音堂の本尊は海中より網で引き上げられた石の観音像と伝えられているが秘仏



● 源平能登原古戦場

沼隈町能登原一帯

県道47号線沿い 車で15分

源平合戦がこの地で繰り広げられたことについて、江戸時代の郷土誌『西備名区』や地元に伝わる伝説では、次のように伝えている。

屋島の合戦（1185年2月）に敗れた平家一門のうち平教経（能登守、平清盛の甥）を大将とする一団は、能登原に陣を張った、一方、那須与一を大将とする源氏の一団は田島の内浦に陣を張り、にらみ合いを続けた。3日目、夜陰に乘じ、源氏が攻撃に出、期を同じくして輦に陣した源氏が動き、挟み撃ちとなり、海は血で染まったという。平家の敗色が濃くなると、ある者は船で西海へ逃げた。

- ・合戦場全体が望める高台は、能登原白浜みかん園入口付近
- ・弓掛松 平教経が弓を掛けたため地這うような特異な樹形となった 昭和38年（1963）枯れ、今は根株だけが残る
- ・矢の島 平家の射た矢がこの島につき刺さり、これから根が出、竹が繁茂したと伝える。



ありし日の弓掛松

● 山南光恩寺

沼隈町 中山南 県道72号沿い
JA 福山市山南支所に近い 車で15分

この寺は、浄土真宗の中国地方における中核的な寺院。創建は、鎌倉時代末の元応2年(1320)明光上人が弟子と共に山南の地に入り、ここを拠点に、備後、備中、安芸、出雲、石見に浄土真宗を広めた。日蓮宗と対立し布教活動が困難となるが、本願寺3世の長男在覚を招き備後守護の前で対論し、これを破り、これ以降、ますます盛んになった。明光は隠居して宝田院(現在常石にある)を開く。

- ・山門 慶長18年(1613)建立(県重文)
- ・鐘楼 同上
- ・銅鐘 慶長18年(1613)の和鐘であるが頂部に円筒状の旗さしが付く特異な形態(市重文)
- ・庫裏に面した庭は心字池
- ・春の桜、秋のカエデやイチョウの色付くころも風情がある



◎ 平家谷(横倉)

沼隈町中山南横倉一帯
県道72号線より分かれ市道を約3km進む 車で30分

中山南横倉には平家落人伝説があり『平家谷』ともよばれている。江戸時代の郷土誌『西備名区』や『備陽六郡誌』が伝えるところによると、平通盛(平清盛の甥にあたり能登原合戦の教経は弟)を大将とする一団がここに隠れ住んだという。この谷には「弓場」「的場」「見張所」「籠球」などの地名と「赤旗神社」「通盛神社」など平家ゆかりの神社が所在する。

また、この谷には何かにつけて白い物を忌む風習があり、下帯、手ぬぐい、手甲などすべて色染めして使った。もし、白い物があると災いがあると伝えられ、綿、夕顔は植えなかつた。白い鳥獣はすべて住まなかつたと記している。

- ・谷底は水田とし、傾斜地に石垣を築いて屋敷としている
- ・通盛夫妻を祀る通盛神社の注連縄の四手は赤 境内に主従の墓通盛の五輪塔などがある
- ・赤旗神社 平家の旗をご神体として祀る ここも赤の四手
- ・福泉坊 平通盛ゆかりの寺 しだれ桜がみごと 福山市御幸町出身の木下夕衛直筆の句碑がある
- ・花しょうぶ園(6月) つばき園(2月~3月)で花を楽しむことができる
- ・その他のゆかりの地は、標識に従って探訪する



● 一乗山城と常国寺

福山市熊野町上山田

県道72号線より分かれ市道を約1.5km 車で30分

福山市は熊野水源地の水面に姿を写す一乗山城(黒木城)は、室町・戦国時代に渡辺越中守兼によって築かれ、本丸郭、空堀、土塁、石垣、井戸などの遺構が残り、市内でも貴重な山城である。

山麓の日蓮宗常国寺は、一乗山城主渡辺氏の菩提寺として創建された。天正4年(1576)将軍足利義昭が毛利氏を頼って頼に来ると、兼の孫にあたる元やその子影は、警固役をつとめた。また、義昭は一時期、常国寺に居住したと伝えられ、遺品が保存されている。

- ・一乗山城(市史跡) 遊歩道があり多くの遺構が見られる
- ・常国寺山門(市重文) 將軍門とも呼ばれ義昭の紋所九七の桐が彫られた板がはめられている
- ・常国寺境内 番神社(市重文) 庭園、墓地など
- ・春の桜、秋のケヤキの色づきも楽しめる



◎ 頼の浦

福山市頼町

県道47号線に乗へ 車で25分

頼の浦は『万葉集』に8首が詠われた古くからの港町。その後も、瀬戸内海の海上交通の要衝の地として栄え、町内に多くの文化財が所在し、伝統文化が暮らしに息づいている。

- ・名勝頼公園 仙酔島 弁天島などをはじめとした周辺の島々
- ・安国寺の文化財 釈迦堂 阿弥陀三尊像 法燈国師像(いずれも国重文) 庭園(県史跡) その多くの文化財がある
- ・対潮楼(国史跡) 江戸時代朝鮮通信使の宿舎として利用 多くの資料を保存 ここからの瀬戸内海の眺めはすばらしい
- ・太田家住宅(国重文) と西町の町並み イロハ丸館 港の常夜灯と雁木
- ・頼の浦歴史民族資料館 頼の歴史と文化財を紹介 企画展を年間数回開催 特にひな人形展は人気がある
- ・その他文化財 パンフレットなどを手掛かりに



平家公谷由来

その昔、源平合戦で屋島の戦いに敗れた平家は、瀬戸内海を渡り能登原に逃れ、さらに向かいの島にいた白鷺の群れを、源氏の白旗と想ったり、かがり火に驚いて飛び立つ水鳥の大群の羽音に動揺した平家は、西へ逃れる者、山へ逃れる者、また山南川を川上へと逃れる者と散々となった。

山南川を奥へと分け入ったのが平通盛の一行であった。途中、岩陰に八日間宿を取り（八日谷）、川の流に箸を見つけ、川上に人の住まいしていることを感じ川上へと入った。途中ではいろいろなことがあった。『我が武運はいかに』と、岩に切りつけ刀傷を残した（刀岩）、川上へと進むが滝（蛇淵）に行くてをはばまれ、支流の谷に入るも急な山のために、馬の鞍は横になり鐘を落とし（鐘の埒）。そこで引き返し小山を乗り越えて（乗り越え）もとの本流を分け入る。

一方、海岸より山へ逃れた一行は山越えしていた。そこで川下より逃れて来た一行と出会い再会を喜び合った（喜勢）。ふと見ると足に蛭が吸い付いて居り、通盛は「我今落人となりぬれば汝までも、我をあなどるぞや」、といって刀で蛭を切り捨てた、その時黒い血が流れ出た（黒血山）、以後この谷の蛭は人の血を吸わなくなった。その地は五つの谷のほぼ中央で、その地に住まいすることにした。以後この地区を「横倉」とも「平家谷」とも呼ばれるようになった。

此の地は谷間も狭く非常に急流でもあり、蚊も住まなかった。そのような谷間の為食糧も少なく、女官達は輶へと出稼ぎにいった。

また、此の谷では白を忌み、白鳥も谷には舞い降りなかったと聞く、谷内にある寺の和尚が、「我は一向宗の僧なるぞ、綿を植えても災はあるまじ」と、綿花を植えたところ、綿も育たず家族一同伝染病にかかったと伝えられて居り、住民に

おいても着衣はすべて他の色に染めて着ていた。

此の姿は、太平洋戦争の終わり頃まで一部の古老は守っていたようです。

今では、氏神の平家の宮（通盛神社）の御幣や垂に赤い紙が使われ、その名残を忍ばせている。

この他にも、此の谷には昔を忍ばせる地名が各所にあり、殿迫、殿方の前、馬通し、弓（射）場、的場、広場、帯刀田、見張り所等々あります。

古書に、この谷に平家の宮四十余社ありと記されて居り、平家の一族を祀ったものではないかと書いてあるが、この谷に逃れて来た人を先祖として祀ったものと想われる。それは、現在四十八戸と少なくなった谷内ですが、姓の数が二十二も残って居り、明治の終わり頃は三十五位の姓があったようです。



地名といわれ

乗り越え (のりこえ)

岩神社 (いわかみしゃ)

鐘を落として引き返し小山を乗り越え、本流に出る再び登った。

平家の一行が岩陰を八日間の宿とした場所で、川の流に箸を見つ、川上に人の暮らしを感じ川上へと入った。この谷を八日谷と呼ばれている

喜勢 (きせい)

川筋をのぼった一行と、海側から山越えをした一行が出会い再会と多勢を喜んだ。

刀岩 (かたないわ)

黒血山 (くろちやま)

八日間宿とした岩陰を後として、川上へと入る途中、「我が武運はいかに……」、と岩に切りつけ刀傷を二つ残した大岩。現在ではダムの手支え岩となっている。

鐘の峠 (あぶみのたお)

互いに再会をよろこび、ふと足を見ると蛭が吸い付いて居り、通盛は「身は今落人となりぬれば、汝までも我をあなたどるぞや」、といって蛭を切り捨てた。その時黒い血が流れた。以後この谷の蛭は人の血を吸わなくなった。

川筋の行く先を淵(蛇淵とよばれている)に阻まれ、小さな谷間を登り山を越えようとしたが、

殿方の前 (おかたのまえ)

あまりにも急な山のため馬の鞍は横になり鐘を落とし引き返した。

館のあった前の地名である。他にもこの館を中心に、前の坂、南宇根、馬通し、などがある。

弓場・射場 (ゆば・いば)

弓矢の訓練を行ったところで射場ともよばれている。そばに弓矢の神様と言れた八幡神社がある。

的場 (まとば)

弓矢の訓練で的になった場所。

帯刀田 (たいとうだ)

武器を身につけ勢揃いした場所。

見張り所 (みはりしょ)

敵の来襲に備え見張りをしていたところ。バクチ場とも言われて居り数箇所ある。

他にも、一族の幸せを待つ(松)と言う意味で

植えられた、「通盛公手植えの松」(通称一本松

||昭和三十年代の始め頃枯れる)。平家の井戸と

呼ばれているもの、殿様の住んでいた殿迫、さむ

らい屋敷跡などがある。

通盛神社 (みちもりじんじや)

創建は建久三年(一一九二)で平三位越前守通盛公を祀る霊社と伝えられている。

ご神体には、通盛公の自彫りと称する通盛公と小宰相の局の座した木像を祀り、通盛公は束帯にて、小宰相の局は帽子に介取りの姿です。しかし、公開されず見ると目が潰れると云われています。

当初この神社は、現在地より南に二百メートルの谷間(古宮という地名の残る)の地に建立されていましたが、度重なる水害をさけるため、江戸時代の初めに現地に遷宮されたものです。

その昔、この宮の祭礼には、常石や千年の海浜より、甲羅が人面に似た蟹が参拝したとの伝へもあります。

その名は平家蟹と呼ばれ、見ると一目でそれと分かる蟹で、壇ノ浦や常石、能登原の海浜に住んで居り、足利義満公はこの蟹を見て、

「過ぎし世の 哀れにしづむ君が名を

とどめおきぬる 門司の関守」

「よるべなき 身は今蟹と生まれきて

浪の哀れに しづむ墓なき」

と詠まれています。また、「スポカズキ」と云う事があり、祭日をスポ祭りとも云われ、茅を頭よりかむり踊っていたと伝わり、雨の日が多かったためとも云われています。この宮は、通称「平家さん」と呼ばれ男女仲を好くする神社として親しまれています。

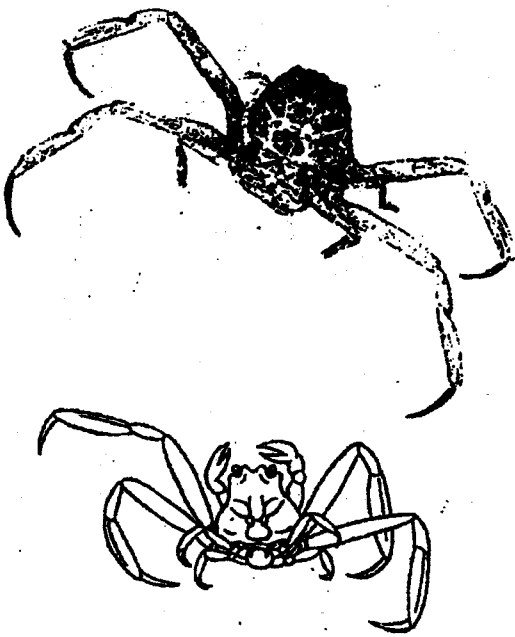
なお、何れの神社にもあり、宮の象徴と想われる鳥居は、建立されていません。それは合戦に於いて、何度か鳥の羽音に愕かされた（富士川の合戦時等）故に、鳥と名の付くものが嫌われて居り、七百五十年祭の時も話題になったようですが、注連石に決定したものです。

現在の神殿は明治三十三年（一九〇〇）に建替えられたもので、用材の樫は伊豫の国（愛媛県）よ

り取り寄せています。拝殿は、大正七年（一九一八）に建て替えられた建物で、屋根瓦の一部には平家の家紋の揚羽蝶を形取ったものが取り付けられて居ます。

また、全国的に行われた平家八百年祭は、この通盛神社でも行われ、神戸の願成寺にある供養塔と同じものを境内の一角に建立し、五十年後に行う予定の、八百五十年祭に開くタイムカプセルを設置して、御弓神事等盛大に行われました。

その後創建八百年祭には、平家琵琶の演奏奉納が行われました。



平家かに
上 写真（ハガミが刺さっている）
下 描写したもの

平 通盛 (たいらのみちもり)

平清盛の弟教盛の嫡男(弓の能登守教經の兄)で、本名公盛という。平家物語等史書には寿永三年(一一八四)二月七日、一の谷の合戦で木村源吾俊綱に討たれる、と記してある。

小宰相 (こさいしやう)

藤原則方の娘で、第七十四代鳥羽天皇の皇女である上西門院に仕えていた。禁中(宮中)一の美女といわれていた。

赤旗神社 (あかはたじんじや)

平家の旗、「赤旗」を祀っている。

福泉坊 (ふくせんぼう)

平家没後、十五代目平秀園が一族の供養のため開祖したもので、小宰相の局の墓があり、現在では、木下夕爾(歌・俳人)直筆の石碑

「入日いま大きく赤し山つゝじ」がある。

小宰相庵と日本庭園

小宰相庵は、平家の館とも呼び、観光客の休憩所及地元民を含めた研修会会場に、することを目的として建築されたもので、平家ゆかりの地で、京都の奥嵯峨野の祇王寺の近くにある滝口寺をモデルとして建てたものです。名前も、平家谷にとって親しみのある小宰相庵と名付けられました。

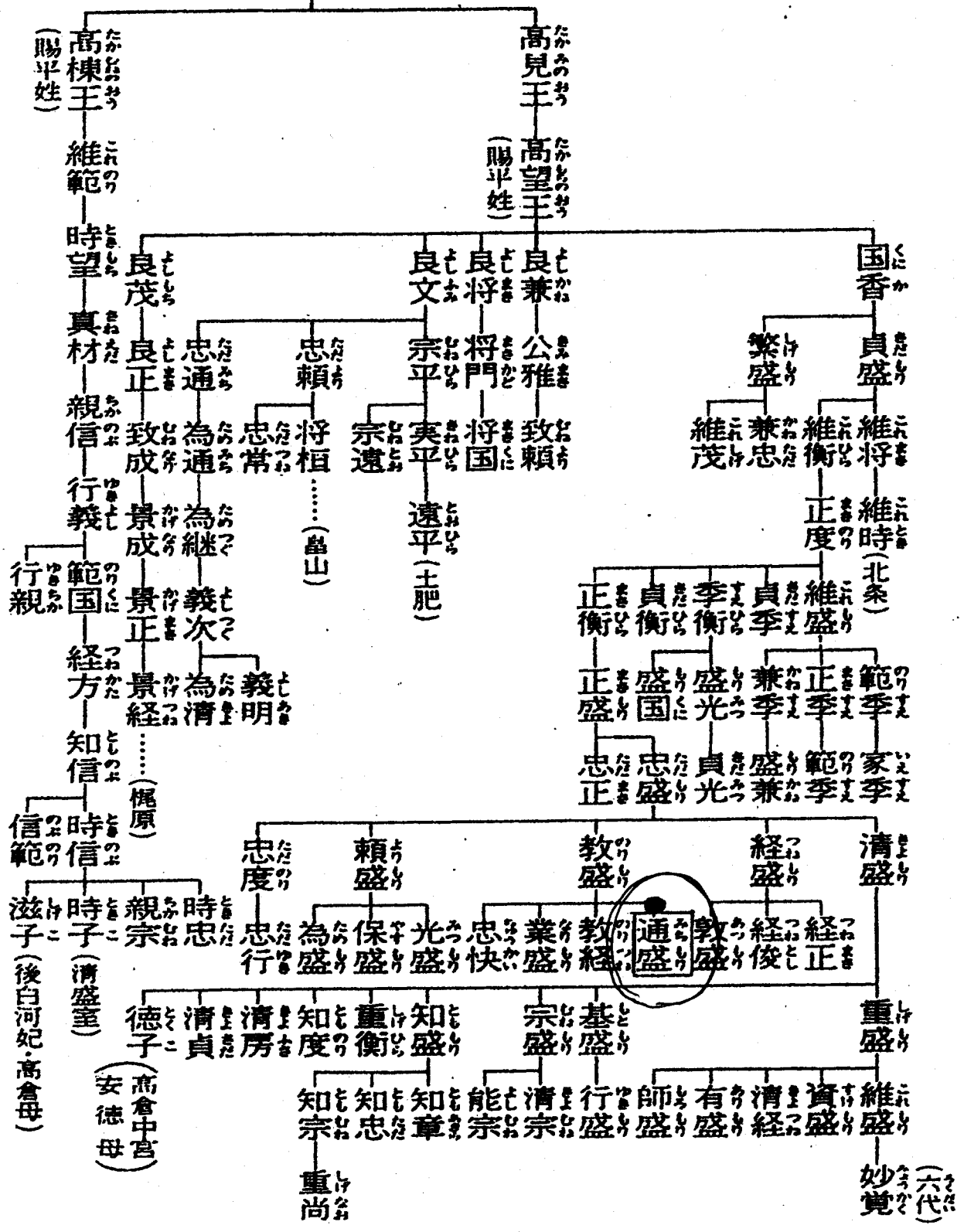
日本庭園は、日本庭園協会会員及新入社員や学生の技術向上を計る、実地研修会を、年一回(四、五日)行い、一カ所で三回ぐらい実施しながら全国を廻っており、土地や材料は地元負担となっています。

園内には、京都の桂垣や、平家の都での暮らしから落人なる様を刻んだ石舞台が作られ、平成七年九月に完成です。

庭園協会での開熱式の九月二十四日には平家琵琶の演奏が行われました。

●平氏系図

桓武天皇—葛原親王



民家大事典 日本民俗建築学会 P366 ~ 367 抜粋

沼隈

(広島県福山市沼隈町)

◆ 瀬戸内海沿岸部に残る小ぶりな民家群 ◆

沼隈町は瀬戸内海に面しており、福山市中心街へは通勤圏内にある。町の東端にある横倉地区は、周囲を二〇〇〜三〇〇mの山に囲われた山南川の谷

えられ、赤旗神社、通盛神社といった平家ゆかりの神社などが集落の各所に残っている。伝統的な構えを残す主屋は、北斜面の等高線に沿った敷地にほぼ南面して建つ。場所によっては斜面に沿って三段四段と敷地を造成し、その間を縫うように道路が通るので、谷あいから眺

めると、幾段にも築かれた石垣と寄棟屋根（以前は妻葺き）の主屋が積み重なった見応えのある集落景観となっている。敷地には、中央に主屋、その下手に駄屋や門を兼ねた長屋（ナガヤ）、上手に離れ座敷（ハナレ）や土蔵を配するのが通常である。ナガヤなどの付属屋が整っているせいか、主屋は復原





- ①小ぶりな農家が斜面に積み重なるように並ぶ中横倉の集落 (1999年◎門田悦治)
- ②北斜面に展開する中横倉の集落遠景 (1999年◎門田悦治)
- ③上横倉の集落 (1998年◎迫垣内裕)
- ④長屋門、離れ座敷など付属屋をよく残した屋敷構え (1998年◎迫垣内裕)

下の写真 門田邸 展示会場です。

母屋 安政 4 年 (1857)

長屋門 文政 10 年 (1827)

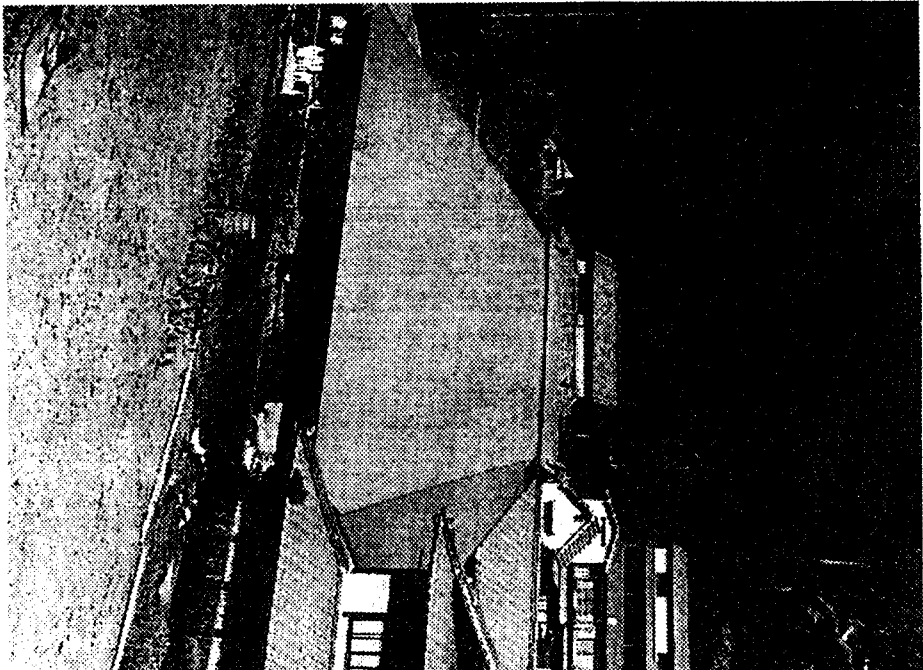


規模で桁行六間、梁間四間程度しかない。しかし、このように小ぶりでありながら、その内の数棟は建築後三〇〇年を経過したと推定できるものもある。瀬戸内海沿岸部の農家は、床上部に四室を配した四間取りが一般的であり、この地区もその例に漏れないが、最も古い遺構群をみると、土間に面した前後の居室境に中数居を設けたり、土間床上境に袖壁付き片引き戸を設けたり

窓を構えたりするなど、沿岸部の遺構としてこれまで類例に乏しかった閉鎖的な装飾がみられる。古い民家が残り少なくなった現在、何らかの保存対策が施された地区を除けば、これほど伝統的形態を良好に保っている集落は稀である。 広島・比治山大学教授(迫垣内 裕)

〔参考文献〕迫垣内裕「広島県の民家」(日本の民家調査報告書集成二三中国地方の民家)東洋書林、一九九九年

ひろしま 東部



古い家並みが残る沼隈町横倉地区の「平家谷」



43

表わら屋根の家並み

一八五年に敗れ、一族に燈峠、的場、弓場と落ち延びたと伝えられるなどの地名も残っている。取り、残された道真などの地区には通盛神社、横倉川に沿って南に折れる貴重なもの。現在も「平家谷」と呼ばれる。奥連下山南・福山線をも、築後三百年とも言われる。から江戸中期の建築と沼隈町横倉地区。

赤幡神社と通盛や平家の旗の赤にまつわる名の入り口で、一九六三年物を見にくる学生などが絶対ないという。

てさかのぼると、平家谷生活が営まれており、建

を持つ神社がある。谷に完成した八日原多公が目に飛び込んで来る。さ

【写真】JR福山駅から進むと、古い家並みから「横倉」行きバスが徐々に姿を見せる。妻で約三分。一日四本。わらぎの屋根が地面近くの突き当たりにはくまでかききる独特の體「平家谷シヨウカツ園」家は、正確に年代を示すものもある。

平清盛のおい通盛(一〇〇年代、平安後期)及び源氏の旗印の白老鎌に住む人は平家の赤を尊

平清盛のおい通盛(一〇〇年代、平安後期)及び源氏の旗印の白老鎌に住む人は平家の赤を尊

武士が屋敷の合戦(一

平家谷

沼隈町の江戸時代中期の民家

迫 垣 内 裕*

1. はじめに

広島県福山市の南西部、瀬戸内海に突き出た沼隈半島の南端には古代から内海の要港として繁栄した郷がある。その西隣にあたる半島西端部に位置するのが沼隈郡沼隈町で、現在は福山市内への通勤圏に含まれる閑静な農村地帯である。このように沼隈町一帯は交通の便に比較的恵まれた地域でありながら、草葺きの農家がまとまって集落を形成しており、かつての農村景観をいまなおよく留めているところである。

当該地域の民家調査を実施したところ、遺構数も多く、中には江戸時代中期に遡ると推定される遺構も存在することが判明した。従来、遺構に限りがあって古い時代の民家の様相が十分に把握できなかった瀬戸内海沿岸部においては、極めて残り具合の良好な特異な地域ということができ、その形式や手法には地域的な特徴も数多く見受けられた。本稿では現在までに調査できた遺構の中から当該地域を代表する古遺構を紹介し、その諸特徴を報告する⁽¹⁾。

2. 主要遺構の特徴

対象民家は農家遺構12棟で、推定復原した形式を表1～3、復原平面等を図1～5に示す⁽²⁾。

(1) 上杉喜八郎家旧屋(中山南横倉, 図1)

山の中腹の狭い敷地に南面して建つ上杉家の主屋は、現在倉庫として使用されていることもあってか保存状況がよいとはいえ、土間及び裏側居室列はほぼ全面的に柱や梁などの旧材が撤去されている。当初材を残すのは床上部表側列に限定されるが、残存する当初材は相当の経年を示し、極めて古式な形式・手法を残している。

復原の概略と建築当初の特徴は以下ようになる。

①建物東側と北側は旧材が失われているものの上屋梁間や小屋裏の規模から判断して、当初は桁行5間半、

梁間3間半(上屋梁間2間半)の規模であったと推定される。この規模はこの辺りの標準規模より若干小さめである。また、土間(ニワ)の桁行規模は1間半であったと推定される。

②平面については、棟通りより0.75間裏寄りの筋が表裏の居室列の境になり、ここより表側は8畳大の居室2室(オエ、デエ)が比較的よく旧状を留めている。裏側の居室は、オエ裏側(北側)柱の裏面(北面)に小舞穴の痕跡が認められることから、この筋が居室境であったと考えられる。従って、裏側列は2室構成となり、横に喰い違った四間取平面であったと考えられる。このうちデエ裏側は入側に無目梁を渡して下屋を屋内に取り込んでいる。また、裏側はガイドコロが小さく(2畳大か)、その奥にオエ中央梁行筋まで突き出した横に長いナンドがあったらしい。

③土間の当初の状況(梁組や上屋柱の有無など)は、梁組も含めて組み替えられていて旧状は明らかでなく、現存する土間奥寄り入側柱も当初からのものか疑問が残る。土間・床上境の上屋柱に残る旧桁行梁仕口は径3寸であり、細身の材を使用していた。

④柱間装置についてはオエ廻りは当初形式をある程度復原可能である。土間・オエ境は中央に柱が立ち、北側柱間には内法より2尺5寸下部に窓敷居が入り(敷居圧痕、対面柱に待柄及び横柄仕口、厚鴨居2本溝)、下半部は土壁(小舞穴残存)であった。南側柱間は南半分に袖壁が付いた片引戸式であったと推定される(南側柱土間寄りに小舞穴、厚鴨居2本溝の内土間側1本は後掘り、方立柱の有無不明)。オエ南側(外側)の東側柱間は、上杉俊夫家住宅のように袖壁付き片引戸(土間境柱西面外寄りに二度仕事の小舞穴、厚鴨居溝不明、対面柱板被せ、方立柱有無不明)であったと思われる。オエ・ガイドコロ境も同様に袖壁付き片引戸であった可能性が大きい(土間境柱西面痕跡なし、対面するオエ・ガイドコロ境柱東面に中央よりや

* 生活学科

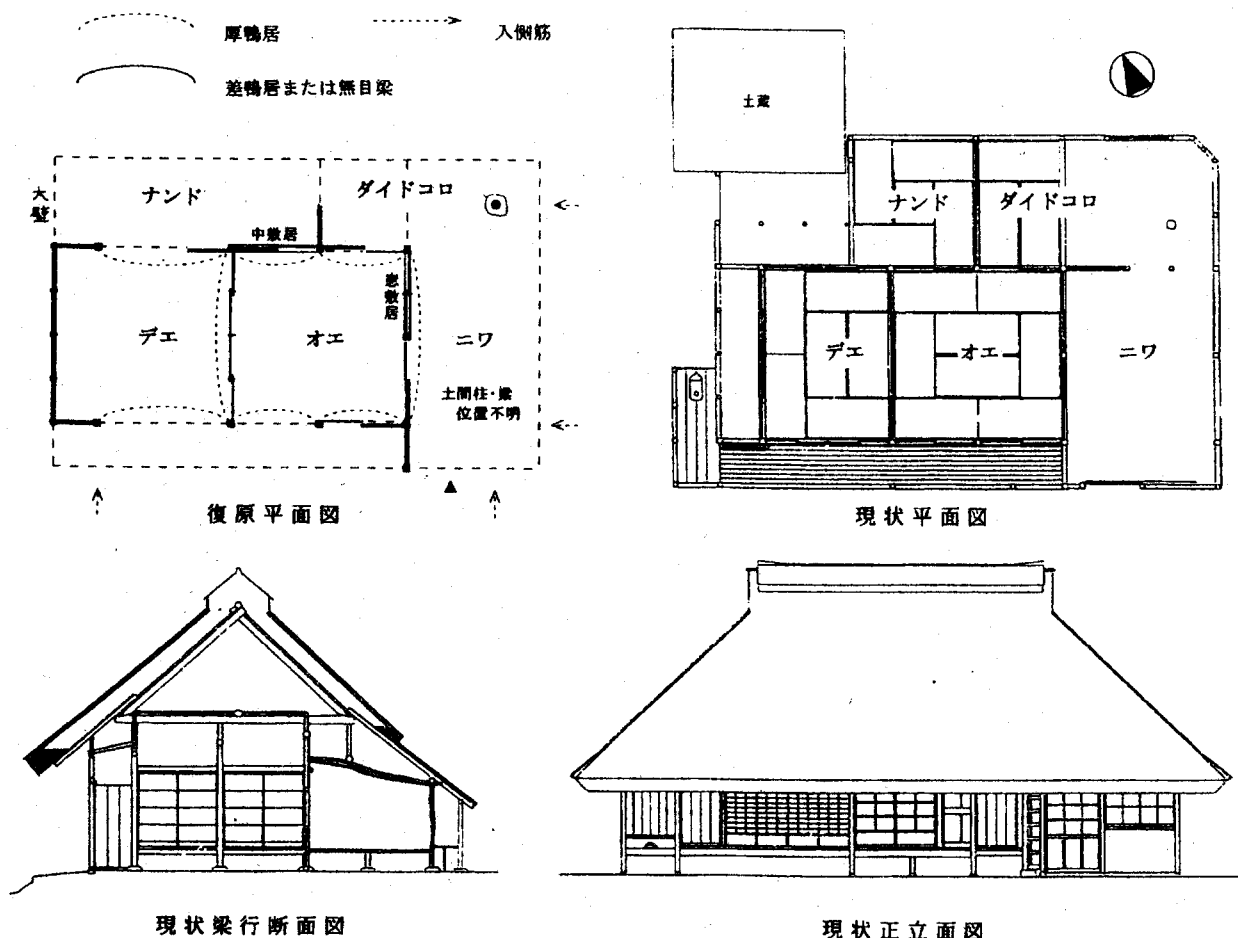


図1 上杉喜八郎家旧屋（中山南横倉）

仕口、西側柱東面に胴縁仕口及び圧痕、厚鴨居2本溝の内表寄りには後掘り、方立柱有無不明)。また、デエ・ナンド境は一部が壁となった何らかの装置が存在したと思われるが詳細は不明である（東端柱表寄りに小舞穴残存、厚鴨居2本溝の内裏寄りには後掘り）。

⑤内法は総て4寸角前後の厚鴨居を使用する。デエ・オエ境及び土間・オエ境の2間長の鴨居も成4寸5分と細身である。柱の見え隠れ部分には蛤刃とみられる手斧のはつり跡が残る。

⑥小屋は2間半長の上屋梁の上に合掌を組む。棟束は用いないが、表側は上屋梁を約1尺突き出して桁を置いた出梁方式である。

平面や構造の全体像には不明な点が多々存在するが、復原によって知り得る形式・手法には古式な要素が随所に窺え、特に柱間装置は極めて閉鎖的な構えである。後に記す池永両家や上杉俊夫家も古い要素をよく残しており、精査の上でこれらと比較すれば、新しい知見も得られると思われる。何れにしても沼隈を代表する古遺構に位置づけることができ、古民家の少ない瀬戸内沿岸部における江戸中期の民家の様相を知ることのできる極めて興味深い遺構である。

(2) 池永亦夫家住宅（中山南横倉、図2）

池永亦夫家住宅は隣接する池永勉家と同一の祖先と伝えるが、その来歴は明らかでない。復原規模は桁行6間半、梁間4間で上屋梁間は3間ある。根継ぎや転用部材も見受けられるが、古い材の残存状況は良好であり、他の遺構では不明な個所が多く存在した裏手部分も含めて旧状を推定することがほぼ可能である。

平面は表側にオヒロマ・デエ、裏側にダイドコロ・ナンドを横喰い違いに配列した四間取で下手（東側）に桁行幅2間の土間がある。ナンドが下手に張り出した平面は、上杉家旧屋と類似する。オヒロマは、当該地域で通常オエと称する部屋で、方2間8畳大の規模をもつものが一般的であるが、当家の場合桁行半間分大きく10畳大の規模がある。この部屋とダイドコロとの境界は、幅が1間半あって厚鴨居（4寸角）を使用する。この西寄りに一部切断された中敷居（3寸角）と当初位置から移動した方立がある。中敷居や方立の現物を残すのは当家だけであった。当初は東端から半間西側に方立柱（厚鴨居下面に痕跡あり）が立ちその西側1間間に中敷居2本溝、東端半間は片引戸であったと推定される（片引戸用1本溝残存）。土間境は中

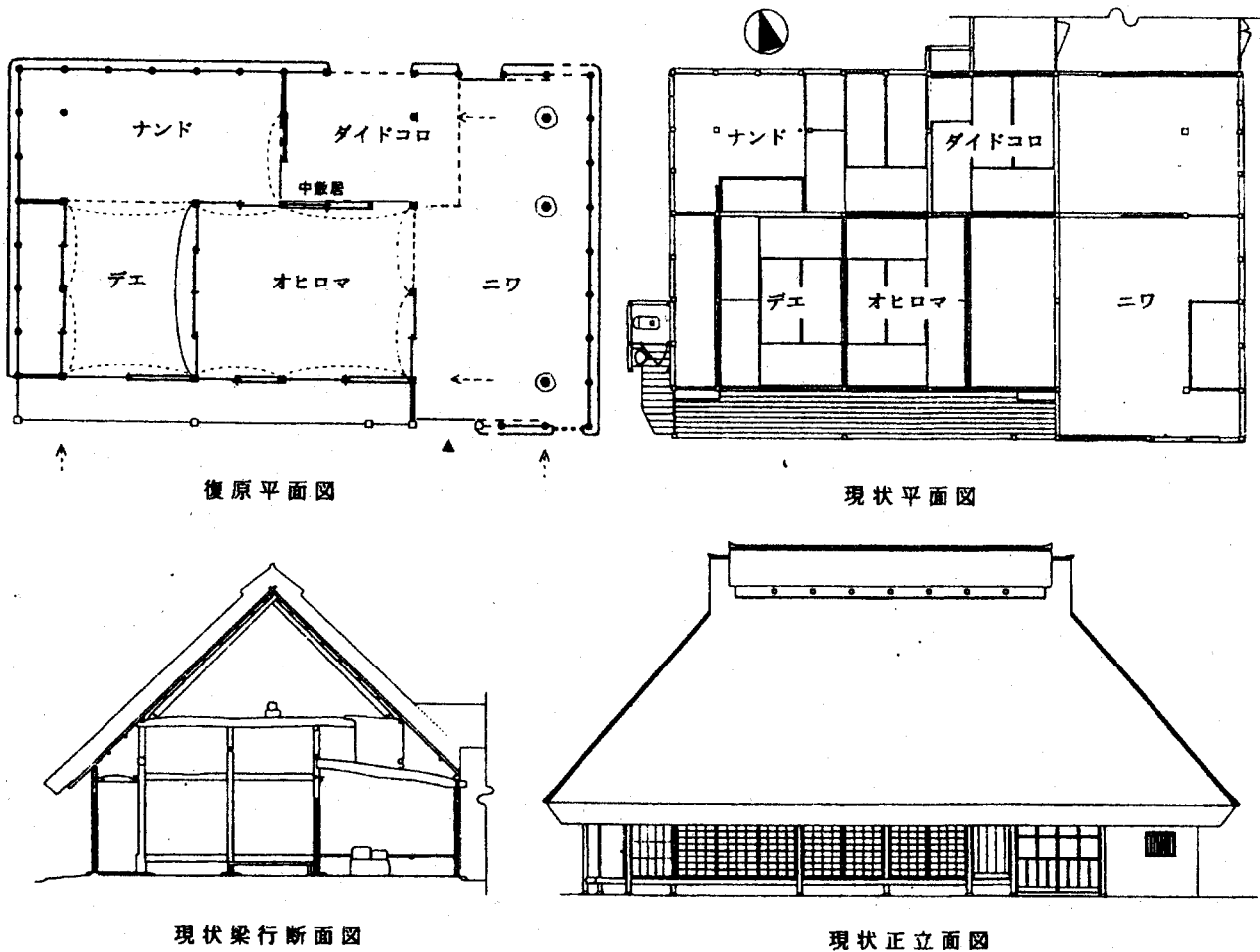


図2 池永亦夫家住宅（中山南横倉）

中央の両側が現状では開放となっているが、北側の柱間には2枚引違（厚鴨居2本溝残存）と袖壁付き片引戸（厚鴨居下面に方立仕口らしい切欠き穴、中央柱土間に偏して旧土壁痕跡）と思われる2種類の痕跡が存在する。転用の可能性もあり何れが当初なのか疑問が残る。ナンド・ダイドコロ境は袖壁付き片引戸（敷居及び厚鴨居に方立柱仕口、1本溝残存、北側柱に貫・小舞穴）となる。オヒロマ・デエの表側（南側）は何れの柱間にも厚鴨居に3本溝が残る。

土間廻りの残り具合も良好で、妻側入側筋には表側と裏側の居室列の境界筋にあたる所（棟通りより0.25間北側）と入側の計3か所に独立柱が立つ。独立柱相互及びこれと土間・床上境上屋柱の間は細いものでは末口3寸程度の胴差梁で連結され（土間・オヒロマ境中央柱の桁行梁は妻側の束と結ぶ）、さらに棟通りにある上屋梁上の桁行梁が土間妻側上屋梁まで渡された簡単な梁組からなる。入側柱を省略するのはナンド入側の1か所だけで、ここは下屋柱とデエ・オヒロマ境の柱の間に架けられた繋ぎ梁と桁行梁を交差させて上屋柱を省略する。土間、床上部の何れも上屋柱を密

に立て、柱頭部を梁行方向は上屋梁、桁行方向は上屋桁と表裏の居室境筋の桁行梁及び棟通りの梁で繋ぎ、内法付近を胴差梁または厚鴨居・差鴨居を用いて固めるのが、当家の基本的な構架方式である。柱には蛤刃と思われる手斧跡が残る。内法は主に厚鴨居を使用する。成は4寸から4寸5分、土間・床上境は5寸5分と若干厚い。オヒロマ・デエ境のみ差鴨居を使用し、成は9寸とかなり厚い。また、オヒロマ・ダイドコロ境、オヒロマ南側の柱間には、古式な板戸の一部分が壁の代用として現存している。

(3) 池永勉家住宅（中山南横倉、図3）

当家は池永亦夫家住宅の東隣に屋敷を構える。以前はナガヤと称する門構えのある駄屋の他に土蔵を3棟構え、敷地周囲を土塀で囲っていたという。主屋は池永亦夫家と同規模で、裏手部分が広範囲に渡って内装替えされており、現状ではダイドコロが土間側に張り出してナンド・ダイドコロ境がオエ中央の梁行筋にあるが、この筋のオエに接した柱には旧間仕切りと思われる痕跡は認められず、その西側デエ・オエ境の柱北面に旧鴨居仕口があることから、この筋に間仕切りが

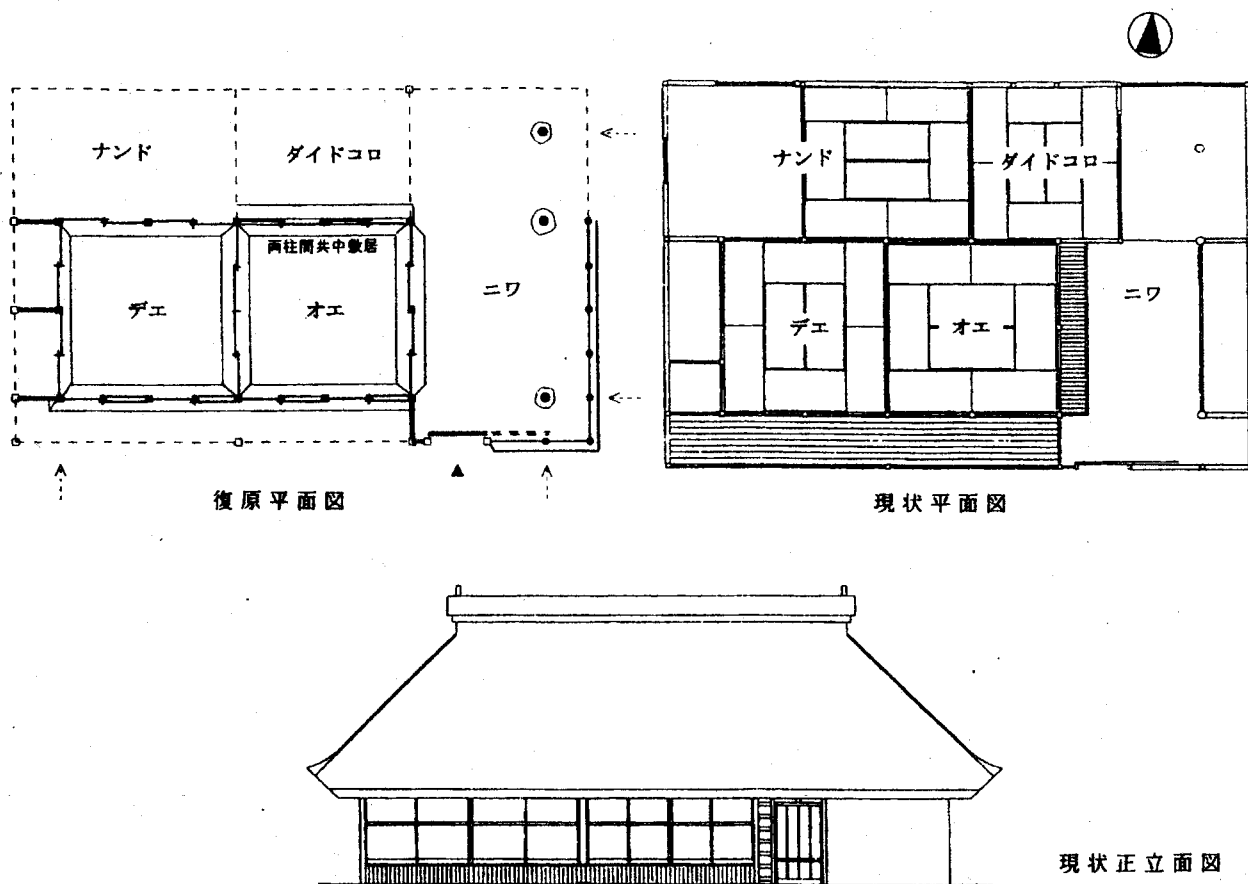


図3 池永勉家住宅（中山南横倉）

あったと思われ、古くは4室が整形に配列された四間取であったと考えられる。当初形式を知ることが可能なのは、主に当初材が表れている表側部分である。表側はオエ、デエと称する何れも8畳大の居室があり、オエ・ニワ境中央に当初は柱が立つので（旧柱切断）、両室の境界以外は1間おきに柱が密に立つことになり、内法には長押を巡らす。

各居室の柱間装置については、オエは南側にデエ南側と同様の3本溝を残す。ダイドコロ境は2間幅の中央に柱が立ち両柱間とも中敷居付きの2本溝（西柱間は対面柱に横柄仕口、東柱間は中央柱に待柄仕口、東側柱は下半部根継ぎのため痕跡不明、鴨居は2本溝当初）に復原される。他の古遺構においてもここに中敷居や片引戸が入るが、中敷居とする場合でも境界の一部に設けるのに対して、当家のように居室境全体に中敷居を通して、わざわざ通り抜けに支障のある方式とするのは例がない。また、厚鴨居や差鴨居を使用せず、薄鴨居（成1寸9分）に長押（成4寸）を取り付けるのも他家にみられない方式である。この長押は、デエ、オエの四周に認められる。特異なのは居室内側だけでなく、反対側すなわち必ず柱の両側から打ち付けてい

ることである。オエ・ニワ境、オエ・ダイドコロ境、デエ・押入境、下屋縁境で確認できる。化粧材というより構造材としての役割が強い。このように形式・手法は、当該地域の他の遺構との異質性を強く感じさせる。

ニワは桁行2間幅の規模があり、池永亦夫家住宅と同様の梁組からなり、入側には独立した上屋柱が3本立つ。土間、床上部とも柱には蛤刃とみられる手斧跡が認められる。

なお、当家の初代忠兵衛は宝永8年（1711）に没しており、形式・手法からも初代が建築した可能性が考えられる。

(4) 上杉俊夫家住宅（中山南横倉、図4）

上記上杉喜八郎家住宅の南に隣接する。復原平面は、棟通りから半間裏側の筋で二分し、各々居室2室を整形に配列した四間取である。他の遺構に比べて床上部の桁行規模が小さいため、上手のデエは裏側の下屋を取り込むことによって6畳の規模を確保しており、押入等の設備はない。裏手は下屋廻りに不明な箇所があるが、建設当初の形式・手法をよく伝えており、痕跡の残り具合も比較的良好である。

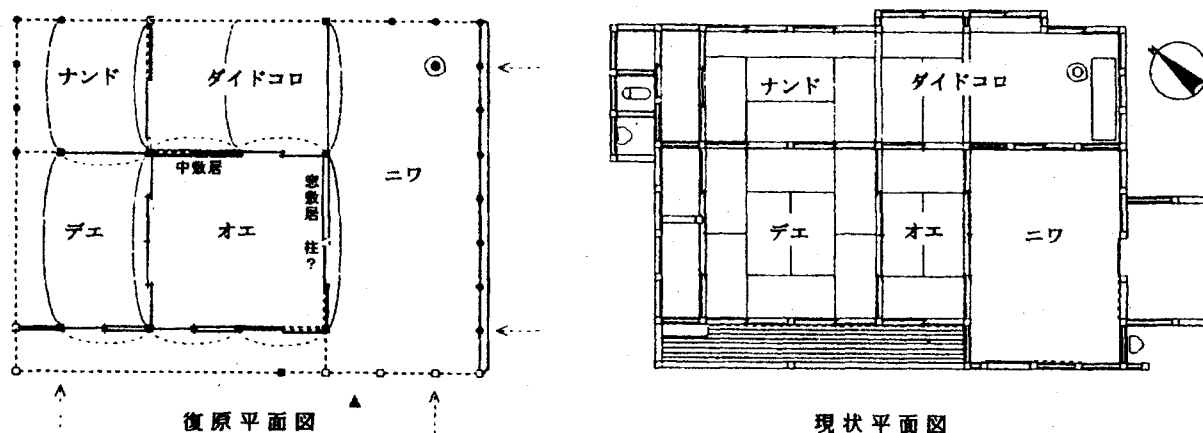


図4 上杉俊夫家住宅(中山南横倉)

オエは8畳大で、ガイドコロとの境界は中央に柱が立ち(下半根継)、西側柱間を中敷居の付いた板袖壁付き片引戸(2枚引)とする(対面柱に中敷居仕口、蹴込板小穴、西側柱の表寄りに胴縁仕口、厚鴨居2本溝当初、方立柱有無不明)。この部屋の南側は土間寄りの柱間を袖壁付き片引戸(2枚引)とし(東側柱外寄りに小舞穴、厚鴨居2本溝は内側に偏在)、もう一方はデエの南側柱間と同様に厚鴨居3本溝が残る。1間間の柱間はすべて厚鴨居(成4寸8分)を用いる。2間長では7寸5分と成が高くなっている。土間との境界は、中央柱の有無が確認できなかったが、北端の柱に窓の痕跡(窓敷居横柄仕口、腰部小舞穴)、南端の柱に袖壁付き片引戸と思われる痕跡(南側柱土間寄りに二度仕事の小舞穴、差鴨居2本溝の内土間寄り1本後掘り、南側柱から約3尺北の鴨居下面に方立柱仕口)が残っている。また、ナンド・デエ境は完全に板壁で塞ぎ(西側柱下半根継、対面柱に胴縁仕口、厚鴨居溝後掘り)、ガイドコロ・ナンドの出入口には袖壁付き片引戸と思われる痕跡(繫梁に1本溝、間柱痕跡、間柱位置より北側に小舞穴)が認められる。ナンド及びガイドコロの裏手入側は、表裏の居室境筋と下屋柱筋の間に1間間隔に繫梁を渡して柱を省略している。

このように柱間装置は古式をよく残しているが、柱見え隠れは角刃による手斧仕上げであり、土間上部の梁組を構成する梁材も径6寸以上と太めのものが多い。上杉喜八郎家旧屋とは年代的に相当な差があると考えられる。また、下半を根継いだ柱が2本あり、デエ・ナンド境の旧板壁痕跡やオエ・ガイドコロ境の中敷居痕跡は、何れも当初材と根継ぎ材に跨って痕跡が続いている。根継ぎはかなり古い時期に施されたらしい。

(5) その他の遺構(図5)

広岡九郎家住宅は上杉俊夫家住宅をはじめとする遺

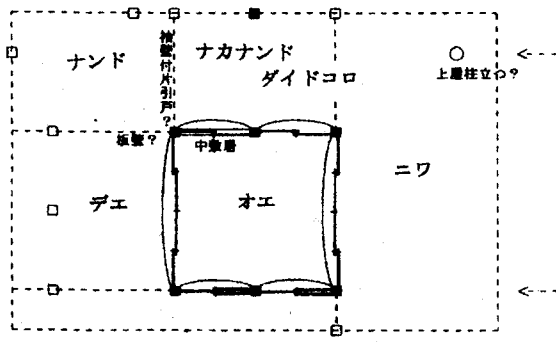
構 No. 4 以前のものに準じた古式な要素がみられるものの、土間・床上境中央柱を手斧仕上げとする他は床上部は鉋仕上げであり、新しい要素も存在する。また、内法の鴨居はかなり厚くなっており、厚鴨居から No. 6 以降の遺構のような差鴨居主体の架構へ移行していく過程を示していると思われる。友野明彦家住宅をはじめとする No. 6~12 では No. 5 以前にあった古式な要素は消失しており、内法に差鴨居を多用した開放的な平面構成に発展している。

3. 結びにかえて

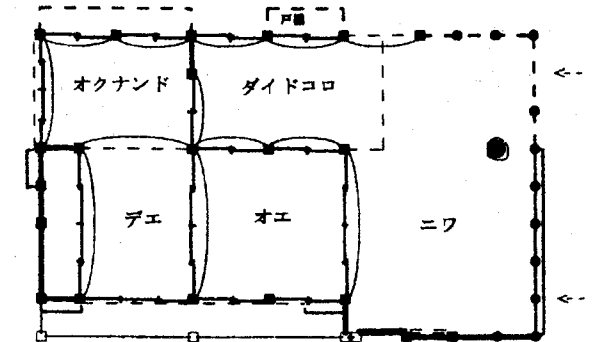
今回調査した遺構を通観すると、表1~3、図5に示すように、遺構 No. 6 以降のものとはそれ以前のものとの間には、形式・手法に明瞭な差異が認められる。遺構数に限りがあるため即断はできないが、年代的差異も大きいと考えられる。上杉喜八郎家旧屋をはじめとする No. 5 までの遺構は、閉鎖的な柱間装置で構成されており、中でも古式な柱仕上げが認められる上杉家旧屋など No. 1~3 はさらに建築年代が遡ると考えられる。県内においても、このような閉鎖的な柱間装置を設けた遺構の類例がほとんどなく、現存遺構の遡源形式を推定する上でも貴重な存在である。特に上杉家旧屋は内法を総て厚鴨居で固めるなど古式な要素が多くみられ、その建築年代は17世紀に遡ると推定される。

沼隈町の江戸時代中期民家は、①主屋は小規模で桁行6間、梁間4間程度であり、土間も桁行2間程度の小規模なものであった。②小規模にもかかわらず土間には上屋柱が立つが、上部の梁は極めて細身で、梁組みも単純である。③平面は四間取系統に属する。④オエ廻りはデエ境を除いた三面を閉鎖的な構えとする。⑤④のうち特に表側列と裏側列の居室境には中敷居の

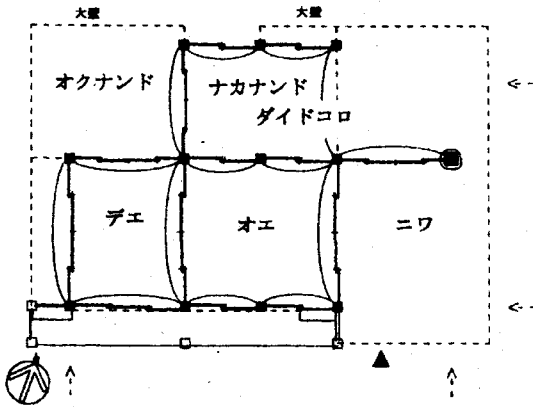
沼隈町の江戸時代中期の民家



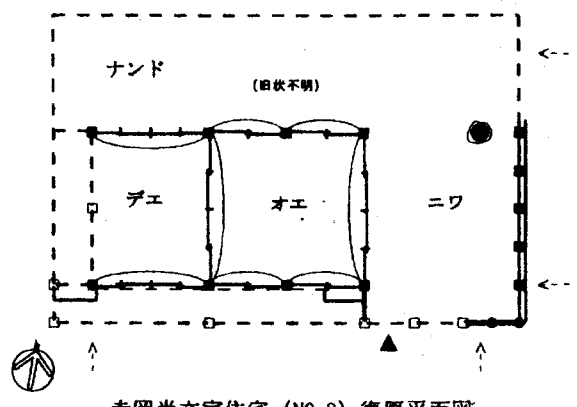
広岡九郎家住宅 (No. 5) 復原平面図



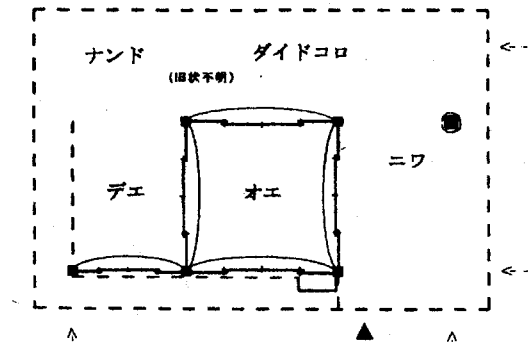
友野明彦家住宅 (No. 6) 復原平面図



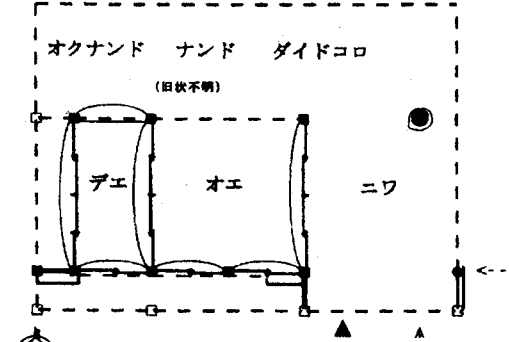
大原清人家住宅 (No. 7) 復原平面図



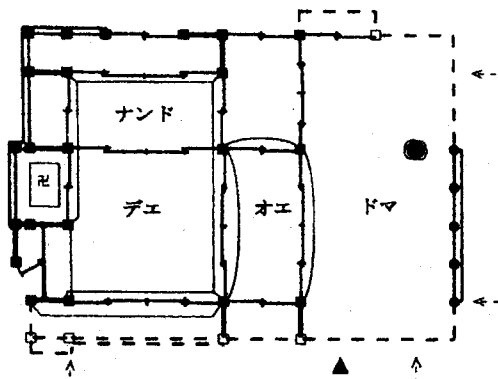
寺岡尚文家住宅 (No. 8) 復原平面図



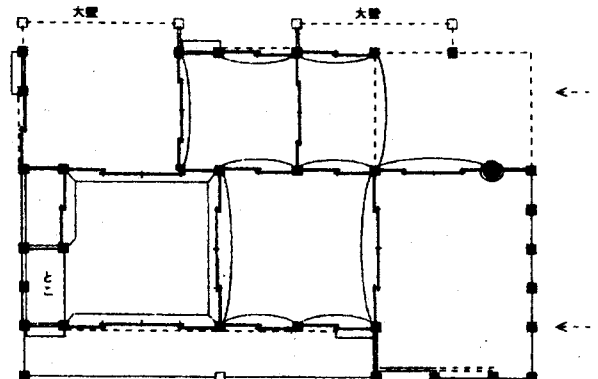
寺岡廣三家住宅 (No. 9) 復原平面図



寺岡勉家住宅 (No. 10) 復原平面図



池永清光家住宅 (No. 11) 復原平面図



岡崎隆家住宅 (No. 12) 復原平面図

図5 復原平面図 (No. 5 ~ No. 12)

結界を設けていて、この間の往来をあまり考慮しない居室構成となっており、一般的な四間取とは異質な面がみられる。⑥床上部内法には厚鴨居を多用すること、などが列記できよう。このうち中敷居の存在や厚鴨居の多用は、従来備後南部から中部の江戸中期以前の農家に散見されていたが¹⁹⁾、古い時期に地域的にこれほど集中してみられた例はなく、民家の地域性を考えるうえで重要である。

4. おわりに

沼隈町の調査は97年度から二度実施した。本稿では特に古い遺構主体に報告したが、草葺きの主屋は町内に100戸以上残存するといわれるので、今後の継続調査によって、特異な形式をもつ当該地域の民家の様相が綿密に把握できると思われる。「沼隈町民家を大切に作る会」をはじめとする地元の有志の方々の民家に対する想いが、今回の調査の発端となり、日本民俗建築学会の一員としてこの度の総合調査に参加した。本稿は調査目的の一つである復原調査の結果に限定して報告したものであり、伝統的な民家の良さを活かしながら現代的な生活にも対応できる住まいの姿を求められている地元の方々に対して、この報告が基礎資料の一部となれば幸いである。

戦後の住生活の近代化に伴い、多くの民家が改造や建て替えによって失われつつあると言及されて久しいが、限定された地域でこれほどの良好な残存状況を示すところは全国的にも珍しくなっている。とはいえ、建物内外とも生活の変化に併せて大幅に改装されてい

る例が大部分であり、加えて時間の関係で梁組や小屋裏の調査が不十分に終わったことは否定できず、現状観察による復原的調査手法の限界も感じさせられた。

末尾ではあるが、調査にあたっては地元有志の方々の全面的な協力を得た。また、各戸にお住まいの方々には快く調査の承諾をいただいた。心より感謝の意を表するものである。

なお、97年度は法政大学工学部古川修文講師及び研究室所属の学生諸君との合同で調査を実施した。本稿掲載の現状図面の大部分は古川研究室作成のものを利用させていただいた。続いて98年度は佐藤重夫広島大学名誉教授他4名との合同調査であることを付記しておく。

〔注〕

- (1) 本稿中池永亦夫家住宅については、拙稿「広島県備後地方南部の民家」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)』昭和57年10月)に調査の概要を報告済みである。
- (2) 他に農家2棟、商家1棟を調査した。農家については、残存状況が悪く旧状をほとんど把握できなかったものは省略したが、少なくとも表廻りの旧状等を知り得るものは、形式比較表及び復原平面図を掲載した。
- (3) 吉原家住宅(寛永12年、重文)、幡山家住宅(18世紀中頃、重文)など。

(受理 平成10年10月15日)

Abstract

A Study on Farming Houses in the Middle of the Edo Period in Numakuma-cho

Yutaka SAKOGAICHI*

The purpose of this paper is to clarify the regional characteristics of the farming houses in Numakuma-cho (Hiroshima Prefecture) through the restored plan and framework. Some houses are arranged with the raised sill track (chu-shikii) between the family dining-living space (dai-dokoro) and the family living space (oe). This floor plan is of a most unique type. I presume this type was formed in the early Edo period.

(Received October 15, 1998)

* Department of Human Life Studies

村川邸について

1. 場所：福山市沼隈町中山南横倉 2 2 4 1 - 1、(なかさんな よこくら) 通称：平家谷
2. 構造：母屋（茅葺屋根+瓦屋根）は築 150 ～200 年位、長屋門（瓦・築 120 年）
3. 経緯：約 20 年間空き家だった生家を 2006 JMRA フォーラム見学会がきっかけとなつて、2007 年 3 月に再生スタートした。「ぬまくま民家を大切にする会」の協力で合力(こうろく)と言うボランティア活動の支援を受けながら、3 年半経った現在も玄関土間を再生工事中。
4. 再生目的：古民家再生や平家谷 PR に貢献する場、人々のつながり拡大の場、先祖に感謝し夢を語る場など仲間が集って楽しい開放的な場としたい。
5. 再生記録：
 - ・ 2007.3 月 再生スタート・大掃除、
 - ・ 4～12 月 柱補強、瓦おろし、壁土落し、井戸掃除、梁磨き、小舞竹準備
 - ・ 2008.1～12 月 柱基礎固め、大引・根太・柱交換、壁塗り、屋根瓦葺き、電気配線
床板張り、台所建具、U 字溝
 - ・ 2009.1～12 月 木小屋石垣修理、いろいろ設置、座敷基礎・柱・壁塗り・屋根瓦、
浄化槽、建具、風呂、流し台、便器
 - ・ 2010.1～7 月 照明器具、土間掃除
6. 写真（再生前の全景・瓦おろし合力）



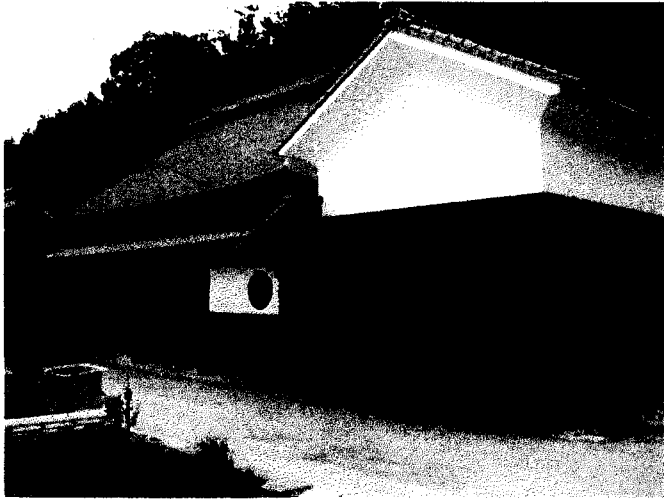
再生 家も人も

雅亮庵主（岡崎 雅亮）

定年後、郷里の沼隈に帰郷して丸三年。私は学校を卒業後、金融機関に就職、転勤で全国を転々。「ながーいながーい出稼ぎの旅」の末、やっと落着いた故郷。五十歳も半ばの頃、第二の人生という事を真剣に考えるようになった。五十年の人生を振り返り、そこで培ったキャリアを棚卸しする事で、第二の人生を生きるヒントがあると考えた。

結局、僧侶と歌手になろうというわかりにくい結論に達してしまった。歌手は学生時代にカントオーネ歌手として活動した経験もあるが、なぜ僧侶の資格を？とよく聞かれる。私自身は一度むけば煩惱の固まり。振り返ると、いくら

洗って
も落ち
ること
のない
煩惱と
戦って
来たよ
うに思
う。五
十六歳
から通
信教育
を受講
し、三
年かけ
て浄土
真宗本



願寺派に得度した。

帰郷後、「ぬまくま民家を大切に作る会」の勧めで、築百二十年の母屋と納屋を再生した。また、破損が激しくどうにもならないと思っていた納屋であったが、これも見事に音楽堂として蘇った。先祖の息吹が伝わってくる。この民家再生は、四十七年ぶりに帰郷した我々の人生を希望ある方向に導いてくれた様に思う。月に一〜二回は、地元の学校や老人ホーム等に招かれる様になった。また、年一回づつ東京、京都、大阪のライブハウスに出演、他流試合をさせてもらっている。歌を聴かせるのではなく、聴衆

のはからいで歌わせていただいている。凡夫の私には、やつと実感できつつある今日この頃だ。毎日通っているお寺の朝参りが私の煩惱を戒めてくれる。ちよつと油断すると、人間とは弱いものだ。自分のキャリアの中で、地域の皆様が喜んでくださることは何でもしたいと思う。私には、僧侶活動と音楽活動は底流で完全に繋がっている。シャンソン、カントオーネはフランス、イタリアの粹な演歌で、民衆に根づいた叫びそのもの。地域の皆様に、日本の歌と同様、身近なものとして親しんでいただきたい！その様な趣旨のもと、普段着の例会を立ち上げた。賛同してくれる愛好家も集まりつつあり、継続する事で何かが生まれるかもしれない。

特定非営利活動法人ぬまくま民家を大切にせる会

設立趣旨書

私たちは平成7年、日本民俗建築学会の指導を得て、沼隈町内の民家の調査研究をするために「沼隈町民家を大切にせる会」を設立しました。調査活動を始めると、地域の民家が急速に姿を消していることに気づきました。古民家は人が住まなくなって崩壊したり、新築するために解体されていきます。

新築するためには新たに森林が伐採され、一方古民家の貴重な古材は膨大なゴミとして処理されて、環境破壊にも繋がっています。

私たちの会員によって、自分の民家を再生して住み続けるという実践が始まるや、会の活動は科学的調査研究から、古民家再生運動へと急速に発展しました。

そして、民家を再生するためには、誠意と熱意と高度な技術を持った職人、工務店が必要です。私たちが、科学的調査研究に裏打ちされた実践力をもって、施主と施工者の間に信頼関係を築いていくことが、民家の再生を実現する上で肝要です。

今、民家再生の運動を強力に展開しなければ、民家は近い将来、完全になくなってしまいます。1棟でも多くの民家を崩壊や解体から救うために、私たちは地域のすべての民家を調査し、それぞれの民家の所有者と親しく面談して、民家再生と心豊かなまちづくりを目指す仲間を増やしていかなければなりません。

私たちは、古民家に生かされた先人の建築技術を大切に思うばかりでなく、古民家での暮らしを通して、絆を大切にせる家族のあり様、近所との緊密な付き合いなど、地域の文化を継承し、暖かい人間関係をもったまちづくりに貢献することを目指すものです。

この会は営利を目的とする団体ではありません。しかし、活動する上で資産の保有や様々な契約の際に支障がでることも予想されるため、ここに「特定非営利活動法人ぬまくま民家を大切にせる会」を設立するものです。

特定非営利活動法人ぬまくま民家を大切にせる会

設立代表者 福山市沼隈町大字上山南1684番地

倉田久士

NPO法人ぬまくま民家を大切にすゝる会 活動概要

1. 1995年沼隈地区の古民家の調査・研究を始める。

日本民俗建築学会が行った沼隈町横倉地区（平家谷）の民家の調査・研究に協力し、この地域の民家集落が全国的にも稀に見る貴重な文化遺産であることを知る。この調査の成果を基に学会のシンポジウムが3年連続して沼隈町で開催された。しかし、この間にも古民家は人が住まなくなつて崩壊したり、新築するために解体されたりして急速に姿を消しつつあることに気付く。

2. 「沼隈町民家を大切にすゝる会」を設立し、民家再生運動を展開する。

「古民家を再生して快適に住み続けよう」を合言葉にして、180名の会員が備後一円に運動を展開し、今までに29棟の古民家を再生している。自宅である古民家を再生して快適な暮らしを楽しんでいる会員は、再生を希望する古民家の所有者があれば、自宅の見学を含め、再生に関する助言を惜しまない。本会では、古民家に生かされた先人の建築技術を大切に思ふばかりでなく、古民家での暮らしを通して、絆を大切にすゝる家族の有り様、近所との緊密な付き合いなど、地域の文化を継承し、温かい人間関係を培う「まちづくり」に貢献することを目指している。

3. 民家再生の相談、施工の斡旋をすゝる。

古民家を再生するためには、誠意と熱意と高度な技術を持った職人、工務店が必要である。私たちが科学的調査研究に裏打ちされた実践力をもつて、施主と施工者の間に信頼関係を築いていくことが肝要である。本会には会員として工務店、独立した大工棟梁、左官等がをり、大規模な再生工事のみならず、日常的な民家保全工事に対処している。なお、本会の斡旋事業はすべて無料で奉仕しているので、気楽に事務局まで連絡されたい。

4. 解体される民家の古材で民芸品を製作する。

止むを得ず解体される古民家の貴重な古材が、膨大なゴミとして処理されているのは、「もったいない」ばかりでなく環境破壊にも繋がっている。先人が長年積み上げてきた高度な技術によって作られた古民家と生活用具には堅実で簡素な美しさが溢れている。

本会では、解体される古民家の古材や家具などを貰い受けて、現代の暮らしに潤いを与える民芸品を製作している。また、捨てられていく木切れや、古布や、昔の生活用具にちょっと手を加えて、ほつとするような生活空間を作り出す作品に仕上げ、定期的に展示・即売会を開催している。

5. 再生した古民家で「田舎の暮らしの体験」やコンサート等を開催する。

1995年、本会設立以来の主たる活動

- 1) 古民家の調査・研究と沼隈地区の古民家の写真を撮影し保存（168棟）
- 2) 日本民俗建築学会のシンポジウムや講演会、日本民家再生リイカ協会の全国大会を沼隈で開催
- 3) 民家保存や再生民家の見学会・研修旅行を開催
- 4) 「古いものの幸せな生き方展」NHK等を開催
- 5) 各種実技講習会（木工、表装、一閑張り、もち花など）を開催

事務局 河野嘉明 084-987-0840
福山市沼隈町草深1267-2

ぬまくま民家を大切にする会～沼隈町のその後

地域づくり推進事業

沼隈町は広島県東南部にあって、人口12,000人余り。かつては、備後豊表の本場として知られたが、現在は、造船とぶどうの町である。2005年2月に福山市に合併して、現在は福山市沼隈町となった。

沼隈町は、1983年からスタートした“地域づくり推進事業”で、全国的に有名になった町である。“地域づくり推進事業”は、町内にある48の行政区（つまり、区あたり人口は平均で250人。安芸高田市の約1/4である）を単位として、地域のビジョンをつくり、それにもとづいて翌年から実際の事業を行うという制度だった。事業内容は集落道路をつくる、水路を改修する、広場・公園をつくるなど、基本的にハード事業で、しかもその多くを住民自らが施工する。それに役場は資料の提供、技術的なアドバイス、実費の負担、関連公共事業の実施などで支援する。その成果は、その後の各地での同様の取り組みの先駆として輝いていた。

“地域づくり推進事業”の基本理念は「自らの地域は自らが知恵を出し、汗を流し、住みよいものに創り育てていく」と表現されている。地域のビジョンをつくるために、ひとつの地区で半年間に約70回の会合を開く、住民の出席率は最後まできわめて高い、役場の職員がそのすべてにつきあう、というような話しを聞いて驚いたものだ。

福山市との合併によって、この制度は消滅するかに見えたが、『合併協定書』『合併建設計画』によると、「地域振興のための基金を造成し」「福山市・沼隈町合併建設計画期間中」について「小学校区を単位とした地域づくり活動を推進」する、ということになったようだ。しかし、この制度が予算ではなく、町当局と担当職員の情熱によって支えられ、行政区という小さな地域単位で成果をあげていたことを考えると、これまでのような展開はなかなか容易ではないように思える。

“ぬまくま民家を大切にする会”の発足の経緯

ところで、今回はそのことではない。

この沼隈町の平家谷をフィールドとして生まれた“ぬまくま民家を大切にする会”の活動について紹介する。20数年間にわたって地

域づくり推進事業で訓練されてきた住民が、「自らの地域は自らが知恵を出し、汗を流し、住みよいものに創り育てていく」活動をどう進めているか、という事例のひとつである。

平家谷は、沼隈町の横倉地区、県道から脇に谷道を3キロほど上っていく沿線にある集落である。平家の落人の伝承があることから、平家谷と呼ばれている。ここには、会の調べによると築100年以上の茅葺古民家が45棟残っているそうだ。町内全体で江戸初期から昭和初期の民家が約140棟確認されているという。

1995年に、日本民俗建築学会が現地視察を行った。中国新聞がそのときの評価を次のように伝えている（その後の調査成果も踏まえて）。

『建物は町内に分散しているが、全体としては重伝建に選定し、町並み保存する価値はある』。調査をした同学会理事で法政大工学部の古川修文教授の評価である。『江戸期に繁栄した近くの瀬の浦の影響を受け、農家であっても軒下や雨どいに曲線模様の細工が施されるなど建築水準も高い』とみる

これを機に翌1996年4月、地元で“沼隈町民家を大切にする会”が発足した。それ以来、同学会が会と協力して度重なる調査やシンポジウムを実施し、会の活動を応援してきた。学会のHPによると、これまで11回開催した日本民俗建築学会シンポジウムの第1回（1997年）第2回（1998年）第3回（2000年）を沼隈町で開いた、とある。テーマはそれぞれ「伝統的建築を生かしたまちづくり」「現代生活にふさわしい民家の改善と住まい方—日本の心と民家—」「これからの民家を考える—住居の変容が子供の知育・徳育に与える影響について—」となっている。これは、単に伝統的な建物を保存しようということではなく「古民家を再生して快適に住み続けよう」を合言葉とした“大切にする会”の思いに、エールを贈るものであったといえる。

その後、事業の実績を積み重ねながら会の活動範囲は町内を超えて旧沼隈郡一帯に広がった。それまでは会則も定めない任意団体として活動してきたが、町の合併を機に「この際NPO法人化をめざして、動ける態勢をつくる」ために、会則や役員体制を整備して、2005年10月30日にあらためて設立総会を開いた。この時に“ぬまくま民家を大切にする会”と改称して今日にいたっている。

大切にする会の会員と事業

設立総会時の会員は78名、現在は88名に増えた。会員には、画家、写真愛好家、音楽家、建築家、もと行政マン、建設業者、表装業者など、幅広いメンバーが名を連ねている。リタイア後ふるさとに帰ってきた人も多く含まれる。それぞれ会社経営、組織運営、学識に長けた人であり、会の運営のキーマンになっている。会員のひとり、母校の中学校に招かれて、3年生に「民家を大切にする」をテーマにした講義をした。伝道師もいるのである。

これまでに、次のような活動を展開してきた。

古民家の再生説得活動

会では、建て替え情報があれば所有者のところに“押し掛け”て面談を重ね、民家の維持の大切さ、再生のメリットや進め方などを説得する活動を日常的に進めている。建て替えでなく、再生ということになれば、工事は会員の工務店が請け負う方法をとっている。

すでに、5棟の再生工事が完了し、会員がそこで生活している。なかには、築120年の生家を取り壊して新築ということで、いよいよ工事契約を結ぶ段になって会から再考を促され、再生を決断した所有者もいる。そのO氏の再生民家は、会の広告塔のひとつとして今では頻繁な見学会の会場となっている。

T氏もあちこちとモデルハウスを見てまわり、すっかり新築のつもりが会員のすすめで再生することになったおひとりである。完成した現在ではT夫人は「再生の道を選んでよかったなあと日々満足して生活している。住み継がれてきて、また手を掛けて住みついでいくことの満足感。古い建具と白漆喰の壁も美しい」と語る。夫人は、後進のために、工務店の打ち合わせ内容から資材の調達、土間コンの打ち方、仮設住居の対策など、12項目にわたる留意事項をまとめて公表している。

土間をフローリング敷きにして寝室にしたり、室内の段差をなくしてスロープにしたり、“修復”ではない。同じように自邸を再生したF氏が強調するように「家は人が住んでこそ意味がある。住む人の居住性に最大限配慮」して再生している。

